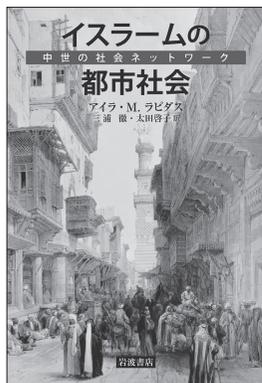


アイラ・M. ラピダス 著
三浦 徹・太田 啓子 訳

イスラームの都市社会 ——中世の社会ネットワーク

紹介者 三森 朋恵



岩波書店

2021年5月

四六判

350ページ

本体4,900円

目次

日本語版序文

まえがき

凡例

序章

第1章 マムルーク朝における都市の変遷

第2章 都市の生活におけるマムルーク体制

第3章 都市社会

第4章 政治システム——マムルーク朝国家と都市の名士層

第5章 政治システム——暴力と無力のはざまの一般民衆

第6章 結論——中世ムスリム都市における社会と政治体制

補論 ヒエラルヒーとネットワーク——中国社会とイスラーム社会の比較

訳者解説 都市から社会へ、歴史から現在へ

参考文献案内

訳者あとがき

索引

地図

ネットワーク(水平的)。著者がこのように表現するイスラーム社会を、名士層・大衆おのおのの役割とその関係に着目しながら、ムスリム都市の新たな見方を探り、ヨーロッパとの違いについてせまるのが本書である。マムルーク朝期のシリアやエジプトを中心として、イスラーム都市について論じている。原著は1967年発表だが、研究者のみならず広く一般に読んでもらうことをめざして全訳された。丁寧な訳者解説が設けられ、著者の経歴や本書の研究上の位置づけ、論点整理などが十二分になされているため、イスラームを専門としない筆者のような一般の読者でも要点がとらえやすくなっている。また、巻末には参考文献も紹介されていて、教材研究や授業準備の面からも活用の幅が広い。

マムルークおよび彼らが築いたマムルーク朝は、世界史ではおなじみである。トルコ系遊牧民などを出自とする彼らは、軍人奴隷として各イスラーム王朝で重用された。このような教科書・資料集で取り扱われる内容を、戦乱期における対応や利権闘争・徴税といった事例の記述を通じてより深い理解へと結びつけている。とくにマムルーク朝において、外来の少数派であったはずの彼らがいかにして支配者たりえたかということが、本書では詳細な記述とともにありありと描かれている。具体的であるがゆえに視覚的イメージとしてもつかみやすい。加えて、スルタンやアミール、ウラマーといった存在との関係性についても、その複雑さと多様さを改めて教えてくれる。なかでもアミールとウラマーについて、その理解が自身に足りていないことに気づかされた。マムルークの父としての側面に焦点化した記述や、大麻・売春・酒についての都市での取り扱い、イスラーム社会における黒人の位置づけやカーミー商人、十字軍との関係を考えるうえでも興味深い内容が多くあった。

イスラームの学習の醍醐味かつ難しさは、主軸のイスラーム教という共通性に、民族系統や地理等々による個性性が様々なレベルで結びつく点とを感じる。その点、本書はイスラーム社会の特徴について述べるにとどまらず、中世という同時代のヨーロッパや中国との比較を通じて、都市を媒介とした鳥瞰的なとらえ方をも読み手に提供する。何より、アラビア語などの外国語になじみのない読者層にとって、具体的な事例やイメージから当時の人々の営みや社会がわかり、かつ読みやすい文献の存在は非常に心強い。

(みつもり・ともえ/秋田県立大館鳳鳴高等学校教諭)